# 【サンプル】外堀を埋めれれ逃げ場を無くす

野菜箱

【同棲するまで】

ガタンゴトンガタンゴトン

（…まただ）

大学に通い出してから毎日ように伊豆菜穂子は誰かにお尻を触られていた、最初は偶然かと思ったが、どうもそうではないらしい、車両を変えたり時間帯を変えたりしても必ず同じようにお尻を触ってくるのであった。

しかし直接文句を言うのは報復が怖いし恥ずかしい、だからいつも我慢していたのだが、今日は何かちがっていた。

（!?）

いつもならお尻を触られるだけで終わるはずなのに、その手はスカートの中に入ってきて下着越しに割れ目をなぞってきたのだ。

「……っ」

恐怖で声が出ない、思わず震えてしまう、菜穂子の反応を楽しむかのように男

は指を動かしてくる、思わず涙目になってしまう、やがて男の手がパンツの中に入ってきそうになった時だった。
「おい、何やってんだ！」
声がする方向に振り返るとそこには同じサークルの釘屋和馬先輩が、おそらく痴漢をしていた男の腕を掴みあげていた。
「てめぇ、今こいつに何をしてたかわかってんのか？」
ドスの聞いた声で相手を睨みつけながら怒鳴ると、男は震えながら「すみません、すみません」と謝っていた。
その後駅員さんに引き渡したあと、駅員室で軽い事情聴取のうえ犯人は警察に引き渡された、後日連絡が来るとのことだった。
私は釘屋先輩に礼を言うと、
「気にしないで」
と微笑まれた、その笑顔に見惚れてしまう、サークルでは釘屋先輩は、黒髪で

クールで知的な印象を受ける人だが優しい先輩として、男女問わず人気がある人だった、そんな人に助けてもなったのだ、以前も私の私物が無くなった時に一緒に探して見つけてもらったことがあり、今回で2回も助けられてしまったのである、これはお礼の一つでもしなければと思い、私は思い切って

「で、でも、なにかお礼をさせてくださ！　私毎日痴漢されてて、怖かったんです。それに前も助けて貰ったし……お礼をさせてください！」

そう言って頭を下げると、釘屋先輩は少し考えた後、口を開いた。

「じゃあさ、今週の土曜日俺と一緒に遊びに行かない？　見たい映画があってさ恋愛映画なんだけど、男1人で見るのは恥ずかしくて……」

クールな釘屋先輩が照れくさそうに言う姿がなんだか可愛らしく見えて、思わずときめいてしまう、

「そんな簡単な事でいいんですか？　もちろん行きます！」

そう答えると、釘屋先輩の表情がパァッと明るくなったような気がした、そし

てＬＩＮＥを交換し雑談しながら大学へ向かった。
それぞれの講義室に向かうため途中で別れた、講義室に着くと友達が話しかけてきた。
「おはよー、どうしたの？　一コマ目居なかったけど何かあった？」
興味津々といった様子で聞いてくるので、少しの照れ臭さを覚える今日あった痴漢撃退のことを話した
「まじ？　痴漢退治とか釘屋先輩かっこいい……流石釘屋先輩‼」
興奮気味に話す友人に釘屋先輩の凄さを改めて実感するのだった。
「あっ、でも釘屋先輩って好きな人が居るらしいんだよね～」
「え？　そうなの？」
思わぬ内容に驚く、そんな私の様子を面白がってか友人はさらに話を続ける。
「うん、この前釘屋先輩に告白した女の子が居てね、その時に好きな子がいるから無理だって断られたんだって、その子泣いてたらしいよ～、」

確かに釘屋先輩はカッコいい、私もあんな彼氏が欲しいと思うくらいに、でも好きな人が居たのか……少し残念に感じる
。
でも今回の映画は、助けて貰ったお礼だし変な気を起こしたら駄目だよね、少し残念な気持ちを抱えながら、その日の講義を受けた。

約束の土曜日、少しオシャレして待ち合わせ場所に行く、５分前に着いたがまだ釘屋先輩は来ていなかった。
（まだ来てないよね……？）
キョロキョロと見渡していると後ろから声をかけられた。
「おはよう、早いね」
振り向くと大学とはまた雰囲気が違う釘屋先輩が立っていた、カジュアルだが

オシャレでとても似合っている。
「お、おはようございます、釘屋先輩こそ早いですね」
緊張してしまい言葉が詰まってしまう、すると釘屋先輩は優しく微笑まれ
「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ、行こうか」
映画館に向かって歩き出す釘屋先輩について行く。
（こんなに素敵な人と二人で出掛けるなんて夢みたい）
そう思うと自然と顔が緩んでしまう。
映画館につくと釘屋先輩はチケットを渡して来た、事前に持ってたって事は相当この映画を見たかったのかな？　私も前々から見たかった作品だったので嬉しかった。
内容は恋愛もので、主人公の女性が、だいぶ鈍感で男性の好意に気づかず、男性が必死に外堀を埋めて、やっとのことで付き合うことになると言うストーリーだった、最後はハッピーエンドで、とてもいい映画だった。

映画の後は近くのカフェに入って感想を言い合ったり、お互いの趣味の話をしたりして充実な時間を過ごせた。
お昼ご飯も一緒に食べた後、駅まで送ると言われたのでお言葉に甘えることにした、
「今日はありがとうね、楽しかったよ」
駅に向かっている途中釘屋先輩が言ってきた。
「いえ、こちらこそありがとうございました、すごく楽しかったです！」
満面の笑みで返すと、釘屋先輩は照れたように顔を逸らしてしまった。
「あのさ！」
釘屋先輩は意を決したように私に向き直ると言った。
「俺と付き合ってくれないかな？」
突然のことに頭が真っ白になる、いきなりの告白に驚いてしまった
「えっと、あの、その、私なんかでいいんでしょうか？」

混乱してしまってとても早口に返答してしまう、それでも釘屋先輩は微笑みながら答えてくれた。
「実を言うと前から気になってたんだ、菜穂子ちゃんのこと、だからよかったら付き合ってくれないかな？」
はにかんだように言う姿にドキッとする、好き人がいるとは聞いていたけど、それはきっと私ではないと思っていたから余計にびっくりしていた。
「はい、よろしくお願いします」
こうして私達は恋人になった。
その後、電車内で痴漢されることも無く平和に過ごしていた、友達に釘屋先輩と付き合う事になったと報告すると、祝福してくれたが同時に「羨ましすぎる」と嘆いていた。
付き合ってから3ヶ月くらい経ったころ、一人暮らしをしている自宅へ帰えり、ふと自分の郵便ポストが目に入る、中を確認すると一通の手紙が入っていた。

差出人は不明で封筒には宛先すら書いていない、不審に思いながらも手紙を開けてみる、中には写真が数枚入っていた。
「ひっ!?」
その写真を目にした瞬間、思わず悲鳴を上げてしまった、そこには明らかに盗撮された、一人で歩いている所やバイト中に写っている私の姿が映っていたのだ、更に写真の後ろには、見守っているからねと一言…
恐ろしくなって、すぐに部屋に入った、部屋の明かりをつけずに、カーテンを閉めてベッドの中に潜り込んだ。
私の両親は遠方でしかも仕事人間で、忙しい人達ですぐに駆け付けてくれるような距離ではなかった。
どうしたらいいか分からずしばらく震えていたが、ピロリロリンとスマホがなる音がしてハッとした。
慌てて画面をつけると釘屋先輩からのＬＩＮＥだった。

『今暇？　よかったら夜ご飯でも一緒にどうかな？』
その一言で、恐怖でいっぱいだった心が和らぎ、神の助けの様に感じた先輩からのメールに私はすぐさまスマホを持ち、今のこの状況を相談したいと返信を送った。
その後すぐ電話がかかってきた。
「もしもし、大丈夫？　怖かったね、もし不安なら迎えに行くけど……」
優しい声でそう言ってくれる釘屋先輩の言葉に私は泣きそうになってしまった。
「ぐすっ、ありがとうございます、今から家に来てもらってもいいですか……？」
「わかった、今から向かうね」
そう言って釘屋先輩は電話を切り住所を送り、私は急いで身支度を整えた。
数分後ピンポーンとインターホンが鳴る、ドアを開けると心配そうな表情の釘屋先輩が居た。
釘屋先輩は私の顔を見るなり抱きしめてきた。

いきなりの事で驚いてしまったが、それ以上に釘屋先輩の温もりが心地よくて、ついぎゅっと抱きつ気返しすごく安心感を覚える。
「本当に怖かったんだね、大丈夫、俺が側に居るからね」
頭を撫でられ、優しい声音でそう言われて、ようやく落ち着きを取り戻した。
「はい、ありがとうございます。先輩の姿を見て安心できました、すみませんご迷惑をかけてしまい」
「いいんだよ、俺が好きでやってる事なんだから、部屋に入っても大丈夫？ゆっくり話を聞いてもいいかな？」
「はい…汚いですが」
そう言って部屋に案内しローテーブルの前に座布団を敷いて釘屋先輩に座ってもらい封筒の件を説明する。
「そんな事があったのか……怖かったね、よしよし」
そう言って釘屋先輩は私を抱き寄せて頭を撫でてくる、その行為で私は我慢で

きずに涙を流してしまう。
「釘屋先輩、怖いです、助けてください」
私が落ち着くまでずっと背中をさすってくれていた、しばらくして私が落ち着いたのを見て釘屋先輩は口を開いた。
「うん、俺に任せて、そいえばご両親とかには相談した？」
「両親は、ちょっと…無理言って県外で一人暮らしさせて貰ってるので迷惑かけたくないんです……」
本当は警察に届けるべきなんだろうけど、両親へ連絡が行くと思うと躊躇してしまう。
「そうか……じゃあ警察に相談するのも無理か……」
「はい……」
「とりあえずさ、明日は休みだし今日は泊まっていい？　ほら、1人でいるのは危ないし、それに彼氏としては、やっぱり彼女を守りたいからさ」

爽やかな笑顔で言う釘屋先輩に思わずときめいてしまう、しかし流石にそこまでしてもらう訳にも行かず断ろうとすると。
釘屋先輩は真剣な表情をして言った
「俺は菜穂子ちゃんの事が好きだ、だから守らせてくれ」
真っ直ぐな瞳で見つめられて、思わず胸が高鳴ってしまう。
「は、はい、わかりました、よろしくお願いします」
「うん、任せて」
そうして、急遽だが釘屋先輩と私は一夜を共にすることに、晩御飯などは家にあるもので済ませて、シャワーを浴びて、そのまま同じベットに入る。
急なお泊りだったため釘屋先輩のパジャマや下着は、マンションの一階にあるコンビニで揃えてもらい少し申し訳なく感じた。
そして二人で並んで同じベッドへ横になる、釘屋先輩は私に腕枕をしてくれて、もう片方の手で私の手を握ってくれている、その優しさに甘えて私は釘屋先輩

の胸に顔を埋めるようにして眠りについた。
朝起きると釘屋先輩は私を抱きしめるようにして寝ていたので少しドキドキしたが、釘屋先輩の匂いに包まれて安心して二度寝をしてしまった。
次に目を覚ますと釘屋先輩は既に起きていて、朝食を作って待っていてくれた。
「おはよう、昨日はよく眠れたかい？」
「おはようございます、はい、釘屋先輩のおかげで安心してぐっすり眠れました」
「それは良かった、さぁ冷めないうちに食べようか」
二人で向かい合って食べるご飯はとても美味しかった。
「あのさ、提案なんだけど」
ご飯を食べ終え片付けも終わったところで、おもむろに真剣な顔で釘屋先輩が話し出した。
何だろうと首を傾げていると釘屋先輩は

「同棲しない？　そうすれば毎日会えるし、何かあった時もすぐに駆けつけられるし、その方が安心だと思うんだ」
まさかの提案に驚きすぎて固まっていると釘屋先輩は続けて言う。
「もちろん菜穂子ちゃんさえ良ければだけど……どう？」
確かに釘屋先輩と一緒に住めたら安心できる、しかし釘屋先輩にばかり迷惑をかけてしまっている事に罪悪感を感じる。
「とても魅力的な提案ですが、私同棲をした事ないですし、釘屋先輩に迷惑をかけてしまいます…なのですぐ結論は出せないのですが、前向きに検討しても良いでしょうか？」
「うん、良い返事を期待してるよ」
そうしてその日は、二人で大学へ向かった。
いくらストーカーがいても、盗撮されたのが一回だけだし、あまり大袈裟にするのもよくないかなと正直私の中では軽く考えていた。

だが翌日、バイトが終わり夜一人で帰宅しドアノブを握った瞬間、ねちょりとした嫌な感覚がした。
（嘘でしょ……）
恐る恐る手を離すとそこにはドロッとした白濁液が付いていた。
その瞬間ゾッとして、慌てて鍵を開けて中に入ると靴を脱いですぐに洗面所に向かう。
そこで改めて確認するとやはり精液だった。
急いで洗い流したが、気持ち悪くて吐き気がするがここで戻したら大変な事になると思い、トイレへと駆け込む。
「おぇ……っ、んぅ……はぁ、はぁ」
しばらくえずいていると何とか落ち着いてきた、ひとまずドアノブはティッシュで拭い、念入りに玄関を掃除をして、急いで釘屋先輩へ電話をかける。
ワンコールで釘屋先輩は、電話に出た、

「もしもし、菜穂子ちゃん？　どうしたんだい？」
「あの、すみません、実は……」
「わかった、すぐに迎えに行くから待ってて」
みなまで言わずとも、状況を察してくれたようで、電話を切った私はソファーに座りながら頭を抱えた。
それから数分後にピンポーンとインターホンが鳴り、釘屋先輩が来てくれた。
「大丈夫？　なにかされたの？」
「実は…」
私は釘屋先輩に事情を説明した、話を聞いた釘屋先輩は険しい顔をしていた。
その後、またもや急遽ではあるが、泊ってくれることに決まった。
「連日本当にすみません……」
「気にしないで、むしろもっと頼ってくれると嬉しいかな」
そう言って釘屋先輩は優しく微笑んでくれるが、申し訳無さすぎる。

その後、釘屋先輩が用意してくれた食事を一緒に夕食を食べたのだが、食欲が無く残してしまい釘屋先輩には悪い事をした。
食事の後、釘屋先輩がと向き合いこれからの事を話し合う事になった、釘屋先輩は真剣な面持ちで話し始める。
「それでさ、昨日の同棲の件だけど…こんな事があったしさ、俺としては心配なんだよね、それに俺も一緒に居たいんだ…だからね？」
釘屋先輩は本当に心配そうな目でこちらを見てくる、これ以上迷惑をかけれない、そう思いながらも、釘屋先輩と一緒なら大丈夫かもしれないとも思っている自分がいた。
「はい、是非お願いします」
と答えると、釘屋先輩はパァと明るい笑顔になって私をぎゅっと抱きしめてくれた。
私より背の高い釘屋先輩の胸にすっぽりと収まってしまい、なんだかくすぐっ

たいと同時に恐怖心が薄れるのを感じた。
「じゃ明日から早速引越しの準備を始めようね！」
その言葉を聞いてハッととある事を思いだし、おずおずと口に出す
「先輩、私、引っ越し費用とか…その家賃とかも…高すぎたら、その……」
もともと両親から反対されて一人暮らしをしているため、仕送りも無く生活費などはバイトで稼いでいたのでお金が無かった、なんなら今は給料日前で自由に使えるお金は無いに等しかった。
不安になり釘屋先輩の顔を見ると、釘屋先輩はきょとんとしていたが、ふわりと笑いかけてくれて
「大丈夫だよ、心配しないで俺が今住んでる部屋に行こう、俺一人暮らしだし、そしたら部屋選びもしなくて済むし、家賃は考えなくていいよ、引越しも俺の知り合いに頼むからさお金の事は気にしなくていいよ」
そう言ってくれる釘屋先輩に申し訳なさを感じつつも、今はその言葉に甘える

事にした。
「本当にありがとうございます」
「いいんだよ、それより今日はもう遅いからさ、もう寝ようか」
「はい」
そう言って寝室へと向かい、夜を明かした。

翌日は幸いにも休日で、大学は無くバイトは体調不良という事で休みにした。
私の部屋にあった、家電や家具などは後日改めてどうするか考えるという事で一旦全てそのままとなり、そして昨日と今日で急いで身支度を済ませて、15時頃釘屋先輩が住んでいる部屋へと向かう事となった。
買い置きしていた生ものなどできるだけ消費するように、お昼ご飯をつくり堪

能し、準備も完了しそろそろ部屋を出ようとしたところで、ピンポーンと部屋のチャイムがなった。
私は思わず身構えたが、釘屋先輩はニコリと微笑み
「多分お迎えだよ、頼んでおいたんだ、ちょっと待っててね」
と言って玄関へと向かった、私は恐る恐る覗くと、そこにはスーツ姿の初老の男性が立っており、微かに会話が聞こえて来た。
「車は外に準備しております。荷物は後で私が運びますので、ご案内致します」
言っていた、知り合いって言うのは、てっきり同い年くらいの人かと思っていたが、違ったようでちょっと驚いた、そうして釘屋先輩は私の元へと戻って来て、まとめた荷物を持ち手を差し伸べてくれる。
「さぁ、行こう」
「は、はい」
差し出された手を取りで車へ向かう、初老の男性に案内されてアパート前に止

まっていた車の後部座席に二人で乗る、車のシートはすごいふかふかで、何も知らない私でも高級車である事がわかるほどだった。
運転席には初老の男性座り発進する、
「あ、あの先輩、この運転している方は、一体どなたなんでしょうか…？　それにこの高級そうな車って…」
私は疑問に思ったことをそのまま口に出した。
すると釘屋先輩は苦笑しながら答えてくれる
「ああ、彼は俺専属の執事の鈴木さんだよ」
「専属の執事?!」
思わず声を上げてしまった、って事は釘屋先輩ってもしかして……
「うん、俺一応釘屋工業グループの御曹司なんだよね、黙っててゴメンね？」
まさかの事実に唖然としてしまう、まさか釘屋先輩があの釘屋グループの御曹司だなんて……

釘屋先輩が私と同じただの一般大学生だとばかり思っていたから、驚きすぎて固まっていると、バックミラー越しに鈴木さんと目が合った。
「和馬坊ちゃまのお世話をさせて頂いております、鈴木と申します、以後お見知りおきを」
そう挨拶され慌てて私も挨拶をする。
そんな会話をしているうちに目的地に着いたようで、車を降りるように促されたので降りてみるとそこは大きいタワーマンションがそびえ立っていた。
「え、こ、ここですか……？」
あまりの凄さに驚いて思わず聞いてしまう、釘屋先輩はなんともないように頷いき、
「うん、そうだよ、この最上階が俺の部屋だから、とりあえず行こうか」
そう言って私の手を掴みマンションの中へと入って行く、荷物は鈴木さんが持って来てくれてる。

エントランスホールも広く、床一面大理石で出来ており、エレベーターもすごく大きかった、そして何より綺麗だった。
そしてあっという間に最上階につき、一番端の角部屋へと辿り着く、何やら機会の上に手をかざしてロックを解除していた、恐らく指紋認証なんだろうか、中に入るとまず広いリビングがあり、ソファーやテーブルなどの家具も置いてある、そして奥には扉があり、そこが釘屋先輩の自室のようだ。
「ここが俺の部屋だよ、隣はゲストルームになってるからね、そこを使っていいよ。あ、でも寝る時は一緒ね」
そう言って案内されたのは広々とした部屋で、ベッドや机などおいてある、クローゼットや本棚まである、この部屋だけで私の住む部屋より倍以上の広さがある、流石は大企業の御曹司の部屋だ。
「とりあえず今日は疲れただろうしゆっくり休んで、明日は改めて必要なものを買いにいこうか」

「は、はひぃ、な、何から何まですみません」
ストーカーの事よりも何よりも色々怒涛すぎる展開に萎縮してしまい噛み噛みになってしまっていると釘屋先輩は少し困ったような笑顔をこちらに向けてくる。
「気にしないでって言ったでしょ？　俺は君が無事ならそれで良いんだ」
そう言われて愛しそうに私の髪を撫でられると恥ずかしくなった瞬間
「お荷物をお持ちしました」
と突然鈴木さんが現れて、慌てて釘屋先輩から距離を取る。
「さぁ、それでは私はこれで失礼致します、何か御用の際はご連絡ください、すぐに参りますので」
そう言って一礼すると、颯爽と去って行った。
「さてと、やっとここに来てもらえた」
そう言って釘屋先輩は私を抱きしめてくる、私はその腕の中で大人しくされる

がままになっていると、釘屋先輩は耳元で囁いてくる。
「菜穂子ちゃん、好きだよ、ずっと一緒にいようね？」
大学ではクール系で通っているのでこんな風に甘い言葉を言われてギャップで可愛らしく思え、顔が熱くなるのを感じる、
「わ、私も好きです」
と小さく答えると、釘屋先輩は嬉しそうに微笑んでくれる。
「ふふっ、これからよろしくね」
そう言って釘屋先輩はキスをしてくる、軽く触れるだけの優しいキスだった。
その後、荷物をクローゼットなどにしまい、釘屋先輩が夕食を用意してくれて一緒に食べた、お風呂に入った浴室はめちゃくちゃ広くてびっくりした。
そしてお風呂上がりにリビングのソファーで釘屋先輩にドライヤーで髪の毛を乾かしてもらい、その後は二人でアイスを食べた、未だに感覚はいいホテルに泊まった時の感覚でまだに実感がわかない。

のんびりした時間を過ごすていると、釘屋先輩は私に問いかける
「ねぇ、菜穂子ちゃん」
ソファの上に座っている私の腰を抱き寄せて顔を覗き込んで来る、
「な、なんですか……釘屋先輩」
ドキッとして視線を逸らす、心臓の音が大きくなってうるさい。
「俺達付き合ってから結構経つけどさ、まだそいうことしてないよね」
そう言って頬を撫でて来る、私は目を瞑ってその手にすり寄ると、優しく顎を掴まれ釘屋先輩の方へと向けさせられる。
釘屋先輩はじっと私を見つめてくるので、私も見つめ返すと釘屋先輩はゆっくりと顔を私に近づいてきて唇を重ねてきた。
最初は啄むように何度も角度を変えて重ねるだけだったが、だんだんと深いものになり舌を絡められていく。
「んぅ……ふぅ♡……あ……♡」

息継ぎも上手くできず、思わず声が漏れてしまう、それでも釘屋先輩は離してくれず、むしろさらに強く抱きしめながら口を絡めて、身体が密着する。
しばらく口内を犯し続けられ、ようやく解放されると釘屋先輩は妖艶に微笑み、そのまま押し倒されて、再びキスをして今度は首筋に吸い付かれる。
「んっ♡……！　く、釘屋先輩……ソファやだぁ…ベットがいいです……」
「ふふ、可愛い、じゃあ行こうか」
そう言って軽々と私をお姫様抱っこして寝室へと向かう、寝室に着くと優しくベッドに寝かさてくれる。
・
・
・
『甘々セックスは本編へ』
――――――――――――――――――――

【釘屋先輩の豹変】
翌日、私は釘屋先輩と共に大学へ向かい休学の手続きを行った、その後自宅に帰ると釘屋先輩は玄関でいきなり私をお姫様抱っこしてきた。
「せ、先輩？　何するんですか？」
「やっと、やっと君を手に入れれた……ずっとこうしたかった……愛してるよ……菜穂子」
いつもの優しい声ではなく、熱を帯びた声で囁かれると、私はゾクッとした感覚に襲われる、そしてそのまま寝室へと運ばれる。
「あぁ……やっぱり君の匂いが一番落ち着くなぁ……安心するよ」
そう言いながらベッドに私を寝かせる。いつもと違う先輩の様子に少し恐怖を感じ震える
「先輩？　どうしたんですか？　いつもの先輩じゃないみたい……」

「あぁ……ごめんね、ちょっと興奮しちゃって……」
そう言って釘屋先輩は私に覆いかぶさるように四つん這いになる、先輩の目は獲物を狙う肉食獣のような目をしており、まるで私を食べようとしているようだった。
恐怖のあまり私は抵抗しようとするが、身体が上手く動かない、そうこうしているうちに先輩は私の服を脱がし始める。
「やっ……やめてください……先輩……どうしちゃったんですか……？」
釘屋先輩は、うっとりとした表情で私の顔を見ながら頬を撫でてくる、なぜかその行為に背筋が凍るような寒気を感じるが、先輩はそんなのお構いなしと言った様子だ。
「ん……？　どうもし無いよ？　俺は前から菜穂子ちゃんが好きだったし……今だって菜穂子ちゃんが欲しいだけ……我慢してたのが爆発しただけ……今やっと君が俺のものになる、ほぼ全て整ったんだ、ここまで来るの長かったなぁ」

（長かった……？）
私は先輩の言葉の意味がわからず首を傾げるが、私の首元に顔を埋めてきた、そして、次の瞬間、鋭い痛みが走る。「いや！　痛い！　やめて！　先輩！」
私は必死に抵抗するが力が強く振り解けない、しばらくして、釘屋先輩はようやく離れてくれた。
「ふぅ……いつも薄いキスマークだったからね、今回は思いっきり噛んでみたよ」
そう言う釘屋先輩の口元微かに血がついている
「先輩……痛い……本当に、どうしちゃったんです……？」
私は泣きながらそう言うと、釘屋先輩はいつものように優しく微笑みかけるが、目だけは笑っていなかった。
・
・

・

『続きは本編へ』

# 【サンプル】外堀を埋めれれ逃げ場を無くす

発行日　2023 年 6 月 8 日

著者　野菜箱
https://www.pixiv.net/member.php?id=6115077

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。